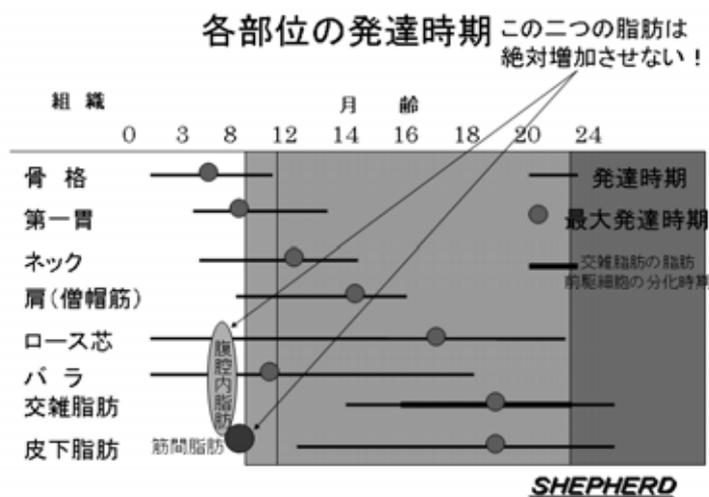


この連載も早くも12回目となってしまいました。本当は全12回シリーズで完結だったはずなのですが、僕の筆が遅いために12回目を迎えても、まだ中期のお話でウロウロしてるのです。斎藤さん本当にごめんなさい。あ、こんなこと書いてるとさらに遅くなるからさっさと本題に入りましょう。

中期に発達する部位、その3は、ロース芯です。ロース芯の発達は、以前は12~13ヶ月齢くらいだと言われていました。僕の肥育の本にも初版から第3版まではそう書いています。ごめんなさい、でもそのころは、本当にそう信じられていたのです。これまで、各部の発達時期は、それぞれの月齢ごとに解剖して、各部の発達具合を見る方法で調べられていました。ところが、昨年牛用のCTスキャナーでおなじ牛の各部の発達を、生きたまま調べられるようになったのです。その結果、ロース芯の最大発達期は17~18ヶ月齢くらいだということが解ったわけです。そう言われてみると、打ち込みの早い(濃厚飼料の増飼が早いこと)短期肥育では、バラは厚いけれど筋間脂肪がかんでロース芯はあまり小さくなく、打ち込みが遅く16ヶ月齢頃からやっと濃厚飼料多給を始める理想肥育の方がロース芯は大きい傾向にありますよね。

今のお話しからも解るように、ロース芯が大きくなるには、いくつかの条件が必要になります。まずは、各部の最大発達時期から復習しておきましょうか。



肥育は9ヶ月齢程度で素牛を導入しますが、その時期から12ヶ月齢程度までは、筋間脂肪の最大発達期に当たります。またバラの最大発達時期でもありますね。ですから、この時期からカロリーの高い濃厚飼料を追い込む短期肥育方式では、バラは厚くなるものの、ロース芯の周囲にある筋間脂肪が大きくなってしまい

ます。ロース芯は、胸最長筋といって枝肉の一番奥にある筋肉で周囲の組織による圧迫を受けやすいのです。(図:2)

打ち込みが早いと筋間脂肪による圧迫を受けるため、ロース芯の発達が阻害され小さくなりやすいのです。



図：2 ロース芯は周囲の圧迫を受けやすい



また、ロース芯も筋肉ですから、最大発達を迎える17～18ヶ月齢で食欲が低下していたり、タンパク質の利用効率が低下していたりすると、どうしても小さくなりがちです。

この時期の食欲低下の原因で、最も多く見かけるのは、ビタミンAの欠乏です。ビタミンAが不足すると、食欲が不安定になり、さらに進むと食欲が低下していきます。筋肉が発達する時期に食欲がないと、発達したくてもできませんよね。また、以前タンパク質の利用の部分でお話したように、DIPとNFCのバランスが悪いと、タンパク質の利用効率が悪く、筋肉の発

達があまくいきません。さらに、ビタミンA欠乏の怖いお話しをしておきましょう。ビタミンAが不足すると、タンパク同化ホルモンというホルモンの分泌が悪くなります。このホルモンはどういった働きをするかという、食べて消化し、さらに吸収したタンパク質を、身につけてくれる働きを持っているのです。早い話が、どれだけいっぱいタンパク質を食べさせて、消化・吸収があまくいったとしても、このホルモンがないと身に付かないので、せっかく食べたタンパク質はただの老廃物として捨てられてしまうのです。ですから、ビタミンA欠乏症の初期に、「食欲は変わらないのにやせてきた」なんて症状が出てくるのですね。

ですから、これまでのお話しをまとめると、ロース芯を大きくするためには、第一に「筋間脂肪をつけないこと」、第2に「中期の食欲を落とさないこと(ビタミンAの欠乏に注意)」、第3がDIP(分解性タンパク質)とNFC(非繊維性炭水化物：ひらたく言うとデンプン)のバランスを保つ(私は1:4.5以上を推奨しています)、ということが大切になってくるわけですね。

もっとも各筋肉の大きさには遺伝的要因が大きく関係します。つまり、ロース芯の大きい系統を導入した方が、ロース芯を大きくするには圧倒的に有利ですよ！ということですが、いま、肉質というとサシばかりに目がいきがちですが、ロース芯の大きい系統や肉色の良い系統なども存在するので、そういった系統にも注意しておいて、交配も考えた導入をするべきでしょう。

これからは特に、サシ以上に「肉屋さんが扱いやすい枝肉」がウリになってくると思います。筋間がかまず、各筋肉が大きく、精肉にしてから変色が遅い、などの条件がそろえば、かなりお肉屋さんにウケがよい枝肉と言えるでしょう。

